

月刊

いじろのとも

第十二卷

六月号

今昔物語

我よかれ

我よかれ

人より

我は

なおよかれ

むかし

いましめ

いま

すすめ

偉そうな権利の主張

子どもが

大人と同じことが

できるのは

偉そうに権利を

主張することだけ

人生を考え直して

みたい人は（八九）

『正法眼蔵』解説（三三三）

仏性の巻を続けます。

しるべし、いま仏性に悉有せらるる有は、有無の有にあらず。悉有は仏語なり、仏舌なり、仏祖眼睛（ぶつそがんぜい）なり、衲僧鼻孔（なつそうびくう）なり。悉有の言、さらに始有にあらず。本有にあらず、妙有等にあらず。いはんや縁有・妄有ならんや。心境・性相等にかかはれず。

しかあればすなはち、衆生悉有の依正（えしよ）う、しかしながら業増上力にあらず、妄縁起にあらず、法爾（ほうに）にあらず、神通修証にあらず。衆生の悉有、それ業増上および縁起法爾等ならんには、諸聖の証道および諸仏の菩提、仏祖の眼睛も、業増上力および縁起法爾なるべし。しかあらざるなり。

今回は、玉城康四郎著『現代語訳正法眼蔵2』（大蔵

出版刊）の現代語訳ではなく、増谷文雄著『現代語訳正法眼蔵第二巻』のものを引用させて頂きます。

それによっても判るように、いま仏性に悉有せられる「有」は、有りや無しやの有ではない。悉有は仏のことばであり、仏の舌であり、したがって、また仏祖の眼目であり、仏者の鼻孔である。それはけっして始有でもなく、本有でもなく、また妙有などというものでもない。ましてや、縁有や妄有である筈はない。心・境・性・相などに関わるものでもない。

だからして、衆生悉有の身心と世界とは、すべて、業の力をもつて変えうるものでもなく、妄情を縁としてもたらされるものでもなく、あるいは自然にしてかくあるものでもなく、神通の力によって証得せられるものでもない。もしも衆生の悉有なる仏性が、業によるもの、縁によるもの、あるいは自然にしてかくあるものとするならば、もろもろの聖者のさとりも、もろもろの仏の智慧も、あるいはもろもろの祖の眼目も、また業や縁や自然にしてしかるものであるう。だが、そうではないのである。

この部分は、さして難しくはないように思われます。ここでは、「有」とは何か、について述べています。

結論的に言いますと、ここでいう「仏性に悉有せらるる有」は、ことばでは表現できないもの、つまり、ことばを絶したもののなのです。でも、あえてことばで表現するとすれば、絶対・無限・永遠なもので、「宇宙根源の原理」とでも言うしかないようなもの、なのです。老子のことばで言いますと、それは「道」に当たっています。

この世のあらゆる存在は、相対・有限・時間的です。それは、ことばで表せまじし、論理が通用し、科学で扱える世界なのです。でも、この世に存在しない、この世を超えたものは、ことばでは表せまじし、普通の論理は通用しないのです。論理的に理解しようとしまじすと、多くは失敗します。

でも、そうなりますと、なぜ、そんな、ことばで表せないものが、必要なのか、ということが問題となります。その点は、なかなかご理解いただけませんが、実は、この問題を解決することが、「人間」が、あるいは「自分」が、この世に存在し、生きていく意味を明らかにすることにつながっているのです。

私たちは、いま、生きています。これを書いている私も、また、この文章を読まれる方も、いま、生きています。でも、例外なく誰でもが、いずれは死んで行かなければなりません。死にたくない、もっと生きたいと思う

のに死ななければならぬのです。いや、自分は歳をとって、木が枯れるように、自然に死んでいくから、死にたくないなどは思わないで、死んでいく、と理屈をいう方があるかも知れませんが、でも、そういう方でも、逆縁で、わが子が自分より先に死んだりしますと、自分が死ぬよりずっと悲しく、一生その悲しみは消えませんが、この死の苦しみを超えることが、決定的には、人間がこの世に生きていく意味を明らかにすることになるのです。

人間が、仏性（ここでいう有）を宿していると言いますのは、この私たちを「死へといざなうもの」でもあるのです。自分の意志に関係なく、時を刻み、成長・老化させ、やがて死を迎えさせて行くのです。

そうした、私たちをいやおうなしに、消滅へと運ぶものが、実は、仏性なのです。

論理的に言いますと、こうした仏性に逆らって、生きようとするればするほど、私たちは、煩惱にさいなまれ、死をおそれなければならぬのです。

私たちが、自由自在に、大楽に、安心立命して、いわゆる幸せに、生きるためには、私たちの中に宿って、私たちが死へといざなうものに、従順にならなければならぬのです。

でも、従順になると、理屈でいつてみて、ほとんど役に立ちません。なぜなら、それは、理屈を超えているからです。従順になる相手が、意識の世界にないからです。この世に存在するもので、論理的にそれを示すことができないからです。前述しましたように、それは、意識を超えた、絶対・無限・永遠なものだからです。ですから、ことばでそれを表すことは不可能なのです。

でも、体験しないと分からないことなのですが、実は、それを知る方法があるのです。それは、「戒律」を守り、「修行（禅譲）」に励むことです。そうしているとき、直観的な、いわゆる「智慧」を得ることができるのです。悪いことは、直観的におかしいと感じることができるようになるのです。そうなりますと、悪を犯さなくてもよくなつてきます。そしてさらにそれを続けていくとき、「解脱」に至るのです。その結果、「解脱知見」を得ることができるようです。この段階を真言密教では「戒・定・慧・解脱・解脱知見」と言っています。

そうなつたとき、死の不安は消え（生死を超越し）生きる喜びが、毎日、勝手にわいてきて、すべてが「清浄（しょうじょう）」に見えるのです。あらゆる存在者、物質も生命も精神（人間）も、すべてが、輝いて見えるのです。そして、自分の中には活動の意欲が勝手にわき

おこつてきます。そうなりますと、自分が生きる人生は不必要となります。ですから、一切の余技を必要とせず、すべてを他者のために生きることができるようです。それが、人間の、あるいは自分の生きる意味なのです。

さて、道元の文章に戻りたいと思います。前述しましたように、ここで言う「有」は、あらゆる限定や条件を超越していますので、本文にありますように、それは、「始有」でも、「本有」でも、「妙有」でも、「縁有」でも、「妄有」でも、ないのです。また、意識の世界（心境）でもなく、その対象（性相）でもありません。

後半出だしの「依正」ですが、このことばは、仏教独特の用語で、依報（環境世界）と正報（われわれの身心）を指しています。先程のことばでいいますと、物質・生命と精神（人間）のことです。それらは、すべて過去の果報であるという意味で報がついています。あとは訳文をお読み頂ければ、ご理解いただけるのではないのでしょうか。

最後に少し注意しなければならぬことがあります。それは、「戒・定・慧・解脱・解脱知見」について述べたことに関連してですが、解脱に至るかどうかを、自分ではからつてはならないということです。只管打坐です。

自作詩短歌等選

数の逆転

無責任
無関心
無気力

昔

マイノリティー

今

マジョリティー

法が廃れる

オウムさえ
いまだ活動
できる国
自由行き過ぎ
法が廃れる

人のため？

昔の政治家
人のため

今の政治家
己がため

不登校の理由

学校へ
行かない子ども
(不登校児)
なぜ増える
行かないことが
一つの自由

虐待死の記事の小ささ

世界に類を見ない
幼児虐待死を伝える
記事も
もはや
とても
小さくなって
しまっている

物騒な車中

この頃は
電車の中も
ぶっそつで
いつ殺されるやら
くわばらくわばら

親殺し

小6も
母を殺せる
歳となり

不毛の再生産

愛された経験のない母が
愛された経験のない子を
再生産する
どこまで続く
この悪循環

助平な高裁判事

高裁の
判事さんでも
人の子で
若い少女と
セックスしたがり

刑事犯
裁く判事が
刑事犯

大衆迎合主義の席卷

いま
ヨーロッパで
大衆迎合主義が
席卷しているという
衆愚政治が
ますます
進行してきた証拠

セクハラ校長の処遇

セクハラの
疑い濃いい
校長の
処遇をめぐり
二〜三転
程度の悪い
教員を
きっぱり辞めさす
英断がある

加害者天国

加害者の
人権だけが
護られて
被害者保護は
ほったらかし
加害者天国
日本の真骨頂

大学は伏魔殿

ある僧侶は
高野山を伏魔殿
といった
田中外相は
外務省を伏魔殿
といった

わたしは

自分の勤務する大学を
そう呼びたい
その定義は
公職を悪用して
私利私欲を図る者達の
集まる場所ということ

でも

考えてみれば

そういう

田中外相の所属する

自民党だって

そんなものじゃないの

だって民主主義では

利益・選好で動くことが

唯一の

合理的行動なのだから

自作随筆選

現代人のシングル指向

毎日新聞には毎週火曜日に「新世紀の思考 第2部

緩やかなきずな」と題する欄があります。そこには、現代を代表する知識人の方たちが、代わる代わる登場して、新世紀についてその思うところを語るわけですが、五月二十九日の担当は、東京大学教授で社会学が専門の上野千鶴子氏でした。その見出しは、「『家族の世紀』の終わり・・・『選択縁』でアイデンティティーの危機管理を」と題するものでした。

この方の考え方には、抵抗を感じるが多かったのですが、今回の文章にも同様の抵抗を感じました。

何に抵抗を感じるか、ということですが、見出しにもありますように、現在「家族の世紀」が終わり、選択縁でアイデンティティーの危機管理を「する」という基本的な考え方そのものについてなのです。

この方の考え方は、家族を中心とした世紀は終わって、シングルを人生と社会システムの基本とすべきだとするものです。次のように述べています。

「シングルは孤独、という思いこみはうそだ。家族とつきあわない分だけ、友人たちと深いつながりを持っている。老後は不安、も正しくない。ひとりやふたりでは、老後の不安は子どもがいてもいなくても同じ。なまじ子どもに頼ると、かえって子どもの生活を破壊し、親子関係がこじれるものになっている。いずれにしても、いつかはシングル、になるのが誰の人生にとつても避けられない。」

また、次のようにも述べています。

「家族や会社だけが主要な人間関係である人々は、それを『卒業』してしまうと同時に、人間関係そのものを失う。血縁でもなく地縁でもなく社縁でもなく、脱血縁・脱地縁・脱社縁の人間関係をわたしは「選択縁」と名づけたが、その核心は加入も脱退も自由なこと。あちらがだめなら、こちらがあるさ。選択縁とは、ひとつの縁での失敗が全人格の否定にならずにすむ。アイデンティティーの危機管理方式でもある。」

これらの記述に、一貫して見られるものは、私の理論で言いますと、自己を肥大化させ、他己を枯れさせてしまっている、ということなのです。

人間は、誰か（＝社会）とところを通わせていないと、とても不安になって、精神的な健康を損なっていくます。

この方も「シングルは孤独ではない」とか「シングルを人生と社会システムの基本とすべきだ」としながらも、誰かところを通わすことを求めています。それを、安定的な地縁や血縁や社縁ではなくて、不安定で、常に浮動してやまないが、しかし、自由に変えられる「選択縁」に求めているのです。その理由は、そうしていれば、「ひとつの縁での失敗が全人格の否定にならずにすむ」し、また、それは「アイデンティティーの危機管理方式でもある」からだ、ということなのです。

でも、私から見ますと、一つの縁での失敗が、全人格の否定になったり、アイデンティティーの危機を招くことが、そもそも、その人が精神的健康を失ってきている一つの証だと言えるのです。

他己が十分働いていますと、たとえ一つの縁で失敗があったとしても（失敗は少ないと思いますが）、それが、自分の全人格の否定と思えたり、アイデンティティーの危機だと感じることはないのです。常に精神的に安定しておられるのです。

言葉尻を捉えるようですが、縁を自由に選べると考えると、既に自己の肥大があるのです。縁は、自分のはからいを超えたものなのです。

例えば、ここでは全く触れられていませんが、家族の

中で育つ子どもの場合を考えてみれば、そのことは、よくご理解いただけると思うのです。

子どもにとって、自分が物心がついたとき、いやおうなしに与えられている両親や親族は、血縁と呼ばれますが、それを子どもは自由に選択することはできないのです。そして、そのことが、その人の人生にとっても大きな影響（宿業）を与え、大多数の場合に、生涯にわたってそこから逃れることができないほどなのです。それこそが、その人の縁なのです。

たとえば、この方ですと、東京大学教授という誰でもが羨むような頭脳と地位を得たことが、この方の宿業といえるのです。この方は、自分で選択し、自分の努力でそうなったと思っておられるかも知れませんが、誰でもが、選択し、努力してそうなれるものではありません。

しかし、そうなったことが、なぜ宿業なのか、ということですが、実は、そうなることでかえって他の人にはない悪業を犯すことになっているからです。それは、この方の発言が社会に大きな影響力をもつことで、かえって、ここで紹介しましたような間違った考え方（現在、多くの人が受け容れるものであるかも知れませんが、世の中をますます殺伐とした無法の世に導く考え方）を世に広めることになるからです。それが、悪業（悪い行

い)だと言えるのです。悪業を為せば、必ず悪果が伴います。その悪果がいつ訪れるか、ご本人自身(あるいはご本人の来世)か、あるいは日本人全体か、あるいは世界全体か分かりませんが、必ず、訪れるのです。また、この方が、果して幸せなのかと言いますと、この方の内的な心境は直接、聞かないと分からないと考えられるかもしれませんが、ご本人は否定されるかもしれませんが、ここで書かれた文章から見て、決して幸せではないと思います。人間は地位や名声で幸せになるのはありません。その行いによつてなるのです。

なお、間違つた考え方と言いましたので、ついでに、もう一つだけこの方の考え方の間違いを指摘しておきたいと思ひます。

それは、アイデンティティーとは何か、についてです。広辞苑によりますと、次のようにあります。

「人格における同一性。ある人の一貫性が成り立ち、それが時間的・空間的に他者や共同体にも認められていること。自己同一性。同一性。主体性。」

この定義からも分かりますように、この概念は、社会や共同体(他者)とに関わるものなのです。自分だけで決まるものではありません。自分が自由に決められるものではないのです。

血縁も地縁も社縁も否定して、自分の好きな人を選択して、関係をもつてみて、それは、その人がアイデンティティーを失っていることになっているのです。

実は、アイデンティティーの本質は、自分の自由な選択を捨て、他者に全てをまかせるところにしかないのです。その他者の中で、最も安定した、あるいは根源的な他者は、私が四聖と呼んでいます、釈尊、老子、ソクラテス、キリストです。こうした時間的・空間的制約を超えた他者(絶対他者)に認められるとき、不動のアイデンティティーを得ることができるのです。それは、自分のはからいを超えて、これらの「絶対の境地」に至った人たちの教えに則つて生きるとき、この世の相対な人たちの人間関係で、アイデンティティーの危機を招くことなぞないのです。

この方のように、自分の自由にまかせて関係を選べば選ぶほど、皮肉にも、自己のアイデンティティーは失われていくのです。

地縁にも血縁にも社縁にも、執着することはありません。また、選択する人間関係にも執着することはありません。なるようにまかせていて、アイデンティティーが危機に陥ることがないのです。そういう境地を、皆が、目指すべきなのです。

釈尊のつとば（一〇一）

法句経解説

（三三三）老いた日に至るまで戒めをたもつことは楽しい。信仰が確立していることは楽しい。明らかに智慧を体得することは楽しい。もろもろの悪事をなさないことは楽しい。

この偈を読みますと感動します。

さきほど書きました『正法眼蔵』の解説が、そのままこの偈に述べられているからです。

私たちが真の幸せに至るためには、戒律を守らなければなりません。それは実は、自己に執着している時は苦しいことかも知れませんが、守っているとき、やがて楽しさが訪れてくるのです。逆に言いますと、戒律を守らない限り、真の幸せは訪れてこないのです。ですから、偈にありますように、「戒めをたもつことは楽しい」のです。

『正法眼蔵』の解説で述べましたが「戒・定・慧・解脱・解脱知見」の、階梯（かいてい）の初めにありますのが、いま述べました「戒」ですが、偈には次の「定」が出てきません。代わりに信仰が出ています。

実は、「定（冥想・坐禅・ヨーガなど）」は信仰に裏打ちされていないと、できないことなのです。続かないのです。釈尊とその教えを信じ、それに則って生きていくとすることが、信仰で、その信仰がなければ、釈尊の勧められる修行が続かないのです。定のことは、直接仰っていませんが、信仰を持てば必然的に定が行われることになるのです。ですから、定ではなく信仰がここでは、説かれているのです。私も、『正法眼蔵』の解説を書きながら、そのことを考えていたのですが、触れる余裕がありませんでした。

次は、「慧」ですが、偈では、「明らかな智慧を体得することは楽しい」となっています。戒律を守り、信仰をもつて修行すれば、結果として直観的な智慧が得られるのです。戒律に反することは、おかしいと思えるようになるのです。

そうなりますと偈の最後にありますように「もろもろの悪事をなさないことは楽しい」というふうになるので、それは、『正法眼蔵』の解説でも書いた通りです。

(三三四) 恣(ほしいまま)のふるまいをする人には愛執(あいしつ)が蔓草(つるくさ)のようにはびこる。林のなかで猿が果実(このみ)を探し求めるように、(この世からかの世へ)あちこちさまよう。

この偈にいう「恣(ほしいまま)のふるまいをする人には愛執(あいしつ)が蔓草(つるくさ)のようにはびこる」という戒めは、現代では戒めではなく、まさに追求すべき目標になっている感があります。

昔は、煩惱は抑えるものでしたが、現在のこの資本主義社会では、追求の対象になっているのです。

先日、ある方が、昔、年寄りから聞いたのだと語って下さった話に次のようながありました。

「我よかれ 我よかれ 人より 我は なおよかれ」

この詩も、昔は戒めだったと思いますが、いまは、勧めになっていると思います。

現代は信仰の喪失時代ですが、信仰を失うことは、人を求め、愛する心(「他己)を失うことです。こうなりますと、人を信じ、人に心を開いて、人とコミュニケーションすることができなくなります。そして、全般的に

不安になって行くのです。

そうなった時、人は、自分の「情動」の追求に生き甲斐や安心を求めます。

情動とは、自分の欲望(三大欲望「性欲・食欲・優越欲)、情緒、気分などです。

信仰を失った人は、この情動を充実させることで、不安を克服しようとするのです。

それが、ここでいう、「ほしいままのふるまいをする人」ということになります。

ですから、現代では、大多数の人がそうなっています。

民主主義しか思想をもたない日本では、学校で教えることは、自己を主張することだけです。我慢し、耐えることは殆ど教えられていません。それは、かえって悪徳として排除されさえしています。

こうして、今、日本は危機的状況に陥っています。女性には自己の追求に性急で子どもを生む意味を見失い、少子化が続いていますし、若者は働く意味を見失い、「無気力」で、ぐうたらになっています。そして国民の多くが、自己に閉じて、他者に「無関心」になり「無責任」になっています。職種を問わず職業倫理の崩壊(モラルハザード)は、目を覆うばかりになっているのです。

後記

一、讃岐は梅雨入りしたというのに、雨がほとんど降りません。一雨欲しいところです。

二、畑のカヤがぐんぐん伸びています。風になびく姿はとても美しいと思います。

三、ナスの初なりを収穫しました。また、先日、さつま芋の苗を一五〇本、植えました。全部、生き着いたようです。

四、家の前の側溝の工事がやっと終わりましたが、道路の舗装ができていません。ほこりがとても多く、閉口しています。早くできればいいのと思います。

五、今年の大学院入学生で、一人の人（女性）が私のゼミを専攻したいと希望してきました。そして、その人と研究課題について先日話し合いました。その人の問題意識が、「障害者差別の解消・完全社会参加」などにあるようでしたので、「欧米先進国では養護学校はもう廃止されているにもかかわらず、日本ではなぜ存在し続けているのか」について考えてはみたらどうか、と示唆しました。

六、先日、ハンセン病の人たちが、国家を相手取った賠償請求訴訟をして、勝訴しましたが、そこで問われたのは、国家の無関心による差別でした。

七、障害者差別は、解消どころか日本ではますます激しくなっているように感じられます。自分の住む地域社会の差別を避けるために、親が、とても辺鄙（へんぴ）なところに建てられていた養護学校を希望するのではないかと考えられます。国連の人権運動となった完全社会参加など、日本では単なるきれいごと過ぎません。

八、ハンセン病であった人たちの処遇についても、私は寡聞にして外国の場合を知りませんが、おそらく日本のように、こんなに長く放置されなかったのではないかと推測しています。日本ほど、障害者の住みにくいところはない、というマザーテレサの言葉を思い出します。

月刊 こころのとも 第十二巻 六月号 （通巻 一三八号）	平成十三年六月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 （ひびきのさと 沙門）中塚 善成 <small>（じょうせい）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと と 口座番号 01610 8 38660	

